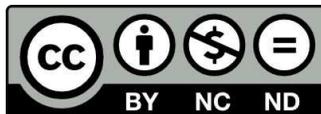


日本IT書紀

046 世代交代

03 未剖篇
卷之六 游魚

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第四十六

世代交代

一

黒澤商店がホレリス式統計会計機械装置を扱った一九二七年から一九三七年にかけての世相を概観しておきたい。

計算機の普及や利用技術を主軸にすえる本書からすると、この期間は、

——まことに奇妙な時代。

と言うほかはない。

とにかく景気はよくなかった。にもかかわらず、計算機が売れた。書類用のファイルやバインダー、タイムレコーダーといった事務機器、「TIMER」ブランドの手廻し式計算機なども売れた。計算機や事務機器の世界から見れば、最初の隆盛期だったといつていい。

なぜかというところ——。

以下は一般的に指摘されることだが、わずかに関東大震災のあと数年、東京や横浜ではビルや住宅、道路や橋の再建と復興で経済が潤った。個人住宅が建て替えられ、地震

に強く、火事でも燃えない三階建の看板建物や鉄筋コンクリートの大規模な建築物が相次いで建てられた。複雑で大量の計算業務が発生し、それまでのソロバンを頼りにしていた手計算では間に合わなくなった、という。

なるほど、一理はある。

——第一次大戦の好況で肥大化した企業や商店が、不況に備えるべく事務能率を改善し、人件費の圧縮を追求し始めたのだ。

と言う向きもある。

たしかにそれも一つの要因には違いない。だが、その動きを後押ししたのは普及啓蒙の活動だった。

大正末期から「執務能率の増進」「能率増進」が盛んに指摘されていたし、日本能率連合会（のち日本能率協会）

から『産業能率』という雑誌が発刊された。坂本重関が『事務能率増進法』を刊行したのは一九三〇年六月、鈴木久蔵が『現業事務能率講話』を著わしたのは同年の十二月だった。

また一九三三年になると、第一回統計機械技術研究会が東京東亜会館で開かれた。こうした啓蒙活動が企業経営者に計算事務の機械化の必要性を認識させたことは疑いを得ない。

もう一つ重要なことは、「数字」の問題だった。このこ

とに最初に気がついたのが前島密だったことはすでに書いた。

いうまでもなく、漢数字の「壹」「壹」「一」、「貳」「貳」「二」あるいは「十」「百」「千」「万」と算用数字（アラビア数字）の「1」「2」「10」「100」「1000」は意味が異なる。漢字の「壹」「壹」「一」、「貳」「貳」「二」、「拾」「十」、「佰」「百」、「阡」「千」、「萬」「万」はそれぞれの数量に当てられた単独の文字なのに対し、算用数字は何桁の数量であっても「0」から「9」までの数字の組み合わせである。

前者は「表現」に類し、後者は「表記」に属する。領収書や寺社への寄付は漢数字で構わないが、これを集計し項目ごとに分類するには、むしろ算用数字が適している。

現在のわたしたちからすると、
——えっ？

という感じなのだが、実に昭和初期まで、統計会計機械装置においてさえ、人々はその結果を漢数字で表わしていた。伝票から機械装置にインプットするにも、機械装置がアウトプットした結果を表に写す際にも、人々は漢数字を算用数字に変換する作業をこなしていたのである。

一九三五年四月、日本能率連合会が

——統計諸表はアラビア数字で表記しようではないか。

と提唱した。

それは、あたかも裸の王様に子どもが発した

「なぜあなたは裸なの？」

という質問に等しい。

この提言がきっかけとなって、まず公共機関が公表する統計を算用数字に変え、民間企業でも当たり前のことが当たり前に行われるようになっていった。計算機械装置の利用が広がったのは、このような事情もあった。

二

計算機から眼を転じて、社会を眺めることにする。

景気は好・不況を繰り返しつつ、下降する傾向を示していた。政治は明治以来の露骨な藩閥偏重が終焉して「民」主体の政党が政権を担ったが、次第に「軍」主導の構図が明らかになった。つまるところ、全体としての見通しはバラ色ではなかった。

日本という国にとってこの時代は、政治・経済のターニング・ポイントといふべき時期に当たっていた。世界史の観点でも「近代」を分析する上で重要なウエイトを占めるのだが、同時にいくつかの動きが錯綜し、かつ相互に連携し、姿を変えて現われる。ために史家は、この時機の再現

にたいへんな苦勞をしている。

国内におけるいくつかの動きとは、次のようなものであった。

一つは国内における政治情勢の変化である。

政党政治が終焉し、軍部が台頭した。

一九二七年四月二十日に発足した田中義一内閣から一九三七年一月二十三日に総辞職した広田弘毅内閣まで、正味九年九か月の間に成立した内閣は次のようだった。

- ・ 田中義一 二七年四月二十日～二九年七月二日
- ・ 浜口雄幸 二九年七月二日～三二年四月三日
- ・ 若槻礼次郎 三二年四月十四日～十二月十一日
- ・ 犬養 毅 三一年十二月十三日～三二年五月十六日
- ・ 齋藤 実 三三年五月二六日～三四年七月三日
- ・ 岡田啓介 三四年七月八日～三六年二月二十九日
- ・ 広田弘毅 三六年三月九日～三七年一月二十三日

いや、めまぐるしい。浜口内閣は九か月、若槻内閣は八か月、犬養内閣は六か月でしかない。こんにちであれば政府与党内の派閥争いだが、この時期に短命内閣が頻出したのは文民と軍部の政権争いが背景にあった。

二年以上続いたのは田中義一と齋藤実だけで、両者に共

通するのは軍人だった。田中は陸軍大将、齋藤は海軍大将である。岡田啓介も海軍大将で、「二・二六事件」に遭遇しなければ、内閣の寿命を二年以上保つことができたかもしれない。

浜口、若槻、犬養、広田といった政党を基盤とする文民内閣であっても、軍部の支持がなければ成り立たなかった。経済力が軍事力を支えていたのだが、第一次大戦を境に軍事力が経済力を支えることになった。

結果として、財界は軍部と手を結んだ。海外における資産と利権の保全・拡大は、外交でなく軍事力によって実現されることになったのだ。

もう一つは国際情勢の変化だった。第一次大戦後に築かれたベルサイユ体制が揺らぎつつあった。経済と国際情勢が密接に関連し、その二つは軍事力を裏づけに展開されていた。

主な歴史的事件でいえば、

- ・ 金融恐慌（一九二七年）
- ・ 山東出兵（同）
- ・ モラトリアム（同）
- ・ 満州事変（一九三一年）
- ・ 五一五事件（一九三二年）

・二二六事件（一九三六年）

である。

大正デモクラシーの時代から日中戦争へ、さらにいえば太平洋戦争への準備が進んだ時期でもあった。時代を色合いで表わすとすれば、この時期は「灰色」が似合っている。灰色の色合いを深くしたのは要人の暗殺である。

一九二一年九月二十八日、安田財閥の総帥・安田善次郎が神奈川県大磯の別邸で刺殺された。享年八十二。

犯人は朝日平吾という三十二歳の不満分子だった。第一次大戦後の不況に際して自分は株式投資で大損をしたのに、安田善次郎は二千万円も儲けたのはけしからん、というのが理由だった。

朝日は善次郎を刺殺した直後、その場で自殺した。手持ちの折靴に入っていた斬奸状には次のようであった。

奸富安田善次郎巨富ヲ作スト雖モ富豪ノ責任ヲ果サズ。国家社会ヲ無視シ、貪欲卑吝ニシテ民衆ノ怨府タルヤ久シ、予其ノ頑迷ヲ愍ミ仏心慈言ヲ以テ訓フルト雖モ改悟セズ。由テ天誅ヲ加ヘ世ノ警メト為ス

同じ年の十一月四日、内閣総理大臣・原敬が東京駅で刺

殺された。享年六十五。

犯人は中岡良一という鉄道省山手線大塚駅職員だった。朝日平吾の安田善次郎暗殺が影響を与えたといわれる。

この時期、政財界で鬼籍に入る人が多かった。

- ・ 一九二二年一月 大隈重信没（享年八十三）
- ・ 二月 山県有朋没（享年八十三）
- ・ 一九二三年九月 加藤友三郎没（享年六十二）
- ・ 一九二四年七月 松方正義没（享年八十九）
- ・ 一九二六年一月 加藤高明没（享年六十六）
- ・ 十二月 大正天皇崩御（享年四十七）

ただちに摂政・裕仁親王が踐祚し、新年号「昭和」が定まった。ために昭和元年は六日間しかない。

こののちややあって、一九三一年十一月十一日に洪澤栄一が九十二歳で没した。

武蔵国榛沢郡血洗島（のち埼玉県大里郡八基村）の豪農に生まれ、徳川三家門の筆頭である一橋家に出仕した。水戸徳川家出身の一橋慶喜が第十六代将軍となるにおよんで幕臣に列し、パリ万国博覧会の日本代表使節（代表・徳川武昭）に随行した。その際の見聞をもとに、一八六八年徳

川家が明治政府から借用した五十万両余を元に事業家に転身した。

洪澤は、第一国立銀行、王子製紙、大阪紡績、東京人造肥料、東京瓦斯、東京貯蓄銀行など五百を超える会社を設立した。明治の殖産興業はこの人物によるところが大きく、またその後の産業の振興にも洪沢家が深く関与した。この人物の死をもって、幕末維新の空気を知る者はほぼ地上から消えたといつていい。

三

中華民国でも世代の交代をきっかけに政局が動いていた。一九二五年一月十二日、孫文が北京で没した。享年五十九。

広東省に生まれ、日本に留学して医者となった。ときの清王朝は有名無実に化し、中国は西欧列強はおろか、新興のアメリカや日本にも租借地を与えるありさまだった。これに義憤して「興中会」を組織し、のちに発展して中国革命同盟会が結成されている。

しばしば日本を訪れ、留学時代の旧友と親しく交わり、ともに、運動に必要な資金を調達した。鈴木久五郎が十万円という大金を渡して、革命の志を気取ったのはそのとき

のことである。

一九一一年は五行干支でいう「辛亥」に当たっていた。「辛亥」は革命の年である。

隋・唐の時代まで、それは「辛酉」であるとされていたが、歴史が重なること必ずしも辛酉の年だけに大きな政変が起こることなくなつた。このため「甲子」の年には「革命」の役割が与えられ、「辛亥」には「維新」の意味が付与された。つまり暦とはつとめて政治的なものなのである。

孫文はそれを利用した。

「天命が革まるのだ」

と民衆に訴えた。

この訴えは分かりやすかつた。

これがために皇帝から人心が離れ、清朝が倒れ、満州族は辮髪を翻して東北の故地に帰っていった。その年の十二月二十九日、南京に「中華民国軍政府湖北都督府」が樹立されると、孫文は百万の民が歓喜するなかで臨時大統領に就任した。

一九二二年三月、「中華民国」の成立をもって孫文は大統領の職を袁世凱に譲り、自らを思想的指導者に位置づけようとした。後世の毛沢東と周恩來の關係に似ている。ところが袁世凱や段祺瑞など軍部との対立が深まり、ついに

袁が「皇帝」を称するに及んで広東に下野し、国民党を組織した。中国では「国父」と尊称される。

孫文が世を去った後、中華民国の中樞を握ったのは段祺瑞だった。安徽省出身でドイツに留学して軍事を学び、帰国するや袁世凱の腹心として武威を張った。しかし南京政府は中国全土を掌握できなかつた。

満州には安国軍総司令・張作霖を首領とする軍閥が半独立の情況にあり、かたや広東省には北伐軍総司令・蒋介石を代表する国民政府が地方軍閥を傘下におさめて勢力の拡張を図っていた。

一九二六年、国民政府軍は湖南・江西省に進入し、二七年の初めには浙江省の孫傳芳軍を破って上海に迫った。張作霖が孫傳芳を支援するために張宗昌の軍を差し向けたため、満州軍閥と国民政府軍の間に緊張がみなぎった。

——これでは段祺瑞に漁夫の利を与えるのみである。と判断した国民政府軍がひとまず揚子江南岸に後退し、ことなきを得た。

一九二七年の一月、国民政府軍は再び北伐を開始し、三月に南京に入城した。その際、一部の部隊が日本領事館を襲撃した。「内政不干渉」を方針とする若槻内閣（第一次）は、この事件に際しても艦隊による領事館員救出にとどめ、騒動はひとまず収まるかに見えた。

四

この年の三月、衆議院で野党の政友会、実業同志会が震災手形の処理について激しく若槻礼次郎内閣を追求した。若槻礼次郎は加藤高明の死没を受けて憲政会総裁に就いていた。

当初、一億円の予定だった震災手形は、産業界の要望を聞き入れているうち、最終的に二億七百万円に膨れ上がっていた。手形の割引について日銀が保証することになっていたので、政府は特別措置法で手形の割引率を引き上げたことを計画していた。野党はこの点を攻め立てたのだった。

一方、米騒動で焼打ちにあった神戸の鈴木商店は、長引く不況で債務超過に陥っていた。同商店が抱える債務総額四億五千万円のうち、台湾銀行の債権が三億五千万円を占め、そのうち六千五百万円が震災手形だった。政府が発行した震災手形の三一%超である。

鈴木商店が倒産したらどうなるのか。

これを追及しない野党はないであろう。

「この焦げ付きをどうするのか」

と野党は詰め寄った。

蔵相・片岡直温は、思慮が足りなかつた。

三月十四日に開かれた衆院予算委員会で彼は、「東京渡辺銀行がとうとう破綻を致しました」と、発言した。

東京渡辺銀行は神戸の鈴木商店のメインバンクである。台湾銀行とも深い関係にあった。

後日の自叙伝で、片岡は「午後四時を回り、銀行は業務を終了しているので問題はないと考えた」と弁明しているが、失態のほかの何ものでもない。

翌日、渡辺銀行に預金者が預金の取り付けに殺到した。渡辺銀行は要求にこたえるだけの現金を持ち合わせていなかった。このために渡辺銀行は事実上、倒産してしまつた。また鈴木商店も破綻し、台湾銀行も休業せざるを得なくなつた。

これが引き金となつて若槻内閣は総辞職し、政友会の田中義一が組閣した。取り付け騒ぎが起こつたのは全国で三十七行におよび、引き出された預金総額は八億八千万円に達したという。

田中内閣の蔵相に就任した高橋是清は四月二十二日、緊急勅令で金銭債務の支払延期（モラトリアム）を三週間にわたつて実施し、ようやく沈静化を見た。

いわゆる「昭和金融恐慌」がこれである。

若槻内閣に代わつて政権を担つた田中義一内閣は、内憂

と外患を一度に背負わされることになつた。清王朝消滅後の中国の動乱である。

それはまるで紀元三世紀、曹（魏）、孫（呉）、劉（蜀）の三国が覇権を争つた時代を思わせる。歴史活劇を見ているようだったが、それは現実の出来事だつた。

~~~~~ 補注 ~~~~~

**安田善次郎** やすだ・ぜんじろう／1882～1921。越中(富山県)で生まれ育ち、二十歳のとき江戸に出て丁稚奉公のち、天保九年(一八三八)に両替商「安田屋」を開業した。維新直後に太政官札を買い占めて巨利を得、第三国立銀行、第四十一国立銀行、安田銀行を設立し、安田財閥を形成した。寄贈した東京大学安田講堂にその名が刻まれている。

安田財閥の主な企業は、富士銀行(みずほ銀行)、安田信託銀行(みずほ信託銀行)、東京建物、安田生命保険(明治安田生命保険)、安田火災海上保険(損害保険ジャパン)、日本精工、安田倉庫、帝國織維など。

**原敬** はら・たかし／1856～1921。初名は「健次郎」といった。生家は石高二百二十七石の盛岡・南部家の武家だったが、明治に入って没落し、一八七三年自ら分家して「岩手県平民」を公称した。外務次官、大阪毎日新聞社社長、立憲政友会幹事長、通信大臣、衆議院議員、内務大臣、立憲政友会総裁、内閣総理大臣などを歴任した。「平民宰相」の渾名は大正デモクラシーで流行語となった。

**中岡良一** なかおか・こんいち／1903～1980。原敬暗殺で無期懲役の判決を受けたが一九三四年、恩赦で出獄したあと満州で陸軍司令部に勤務した。

**大隈重信** おおくま・しげのぶ／1838～1921。佐賀鍋島藩に生まれ、維新後に徴士参与、のち立憲改進党の総裁に就いた。三菱財閥の岩崎弥太郎と親交があり、一八八二年に東京専門学校

(のち早稲田大学)を創設し、日本における一大知識集団を形成する母体となった。一九一四年四月から一六年十月まで首相を務めたが、国粹主義的かつ好戦的な性格を帯びていたことは意外に看過されている。

**山県有朋** やまがた・ありとも／1838～1922。長州松下村塾に学び幕末には「狂介」を称した。陸軍大将として日清戦争で第一軍司令官、日露戦争では参謀総長を務めた。二度にわたって内閣首班に任ぜられ、公爵。明治の元勳の代表的な人物であった。正しくは「山縣」だが、本稿では『日本人名辞典』(三省堂)の表記に従った。

**加藤友三郎** かとう・ともざぶろう／1861～1922。安芸藩(広島県)に生まれ、日露戦争で中将連合艦隊参謀長として、元帥東郷平八郎の幕下で日本海海戦に参加した。海相を四回務め一九二一年にワシントン軍縮会議に首席全権として臨んだ。二二年六月から首相の職にあつて軍艦建造の縮小と陸軍四個師団の廃止などを実現した。子爵。

**松方正義** まつかた・まさよし／1835～1924。薩摩の下級武士の家に生まれ、長じて大久保利通に従い公武合体、倒幕運動に参加した。維新直後に日田県知事を務め、のち税財務・勸業をもっぱらとし、首相二回、蔵相八回の間日本銀行を創設、兌換紙幣を発行し、金本位制を実施した。赤十字社の創立などに業績を残した。公爵。

# 日本IT書紀 046 世代交代

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。